



JAXA筑波宇宙センター見学での集合写真

### 文化の異なる3カ国から招へい

## 日本の最先端科学技術を体感

筑波大学グローバル・コモンズ機構では、2019年12月9日から12月15日の7日間にわたり、「日本の最先端科学技術と人工知能の研究を知る」と題したプログラムを実施した。招へいはミャンマー、カザフスタン、ロシアの3カ国から行われ、大学生8名・大学院生2名・行政官2名・教員1名の計13



野村名男  
(筑波大学  
グローバル・コモンズ機構  
国際交流支援部門長、当時)

## 筑波大学の活動報告

### Ⅱ 特別連載Ⅱ

## 科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第270回

※現在、さくらサイエンスプログラムは新型コロナウイルスの感染防止のため、海外からの招へいプログラムの実施を実施していません。

プログラム	
1日目	来日、入寮手続き、ウェルカムイベント(懇親会)
2日目	オリエンテーション (講義：筑波大学の学群、大学院及び研究活動の紹介等) サイバニクス研究センター、計算科学研究センターの視察
3日目	附属病院視察、ロボティクスに関する講義及び関連ラボ研修 エンパワースタジオ視察、研究基盤総合センター(加速器)視察
4日目	人工知能に関する講義及び関連ラボ研修 附属図書館等学内施設の視察 筑波大学生(日本学生及び留学生)との交流 サイバーデザインスタジオ訪問
5日目	筑波研究学園都市研究機関等にて、 最先端科学技術に係る視察及び文化体験 (JAXA、国際協力機構、農業・食品産業技術総合研究機構 等)
6日目	日本人学生及び留学生との協働演習 プレゼンテーション、修了式
7日目	出国

名が参加した。

プログラムは、本学及び筑波研究学園都市の科学技術分野に関するラボ研修や施設見学を中心として構成され、本学内においては、システム情報系教員によるサイバニクス研究センター等でのロボット工学、情報技術(IT)、人工知能などの分野を融合した新領域についての講座や計算科学研究センターでのスーパーコンピュータに関する講義、筑波大学附属病院、研究基盤総合センター(加速器)、エンパワースタジオ等において、多様な先端技術や先進設備の視察を行った。また、参加学生には本学への進学も視野に入れてもらえるよう、本学学生との交流の場を作るとともに、図書館など学内設備についても視察することで、実際の日本での生活をイメージしやすいよう配慮した。

学外においては、人・ロボット・情報系を融合した最先端ロボットスーツHAL®の開発・製造・販売を行うサイバダイナイン(株)運営のサイバーダイナミクススタジオ、農業・食品産業技術総合研究機構の遺伝資源センター、国際協力機構(JICA)筑波、宇宙航空研究開発機構(JAXA)筑波宇宙センターへ赴くことで、「科学都市つくば」ならではの最先端科学技術や国際的研究都市の一端に触れる機会を提供した。

### ◎プログラムの成果

文化や発展事情の異なる3つの国から受入れを行うことにより、科学技術について日本での現状の視察だけではなく、各国の事情の相互理解と、これに基づくそれぞれの所属組織での将来的な比較や対応を検討することができた。筑波大生との協働演習では、招へいされた学生、教員、若手行政官が、それぞれ

### ◎受入れ機関の効果

実際に、多様な分野の研究施設を一度に視察する機会、さらにはそこで研究を行っている研究者から紹介されながら視察できる機会はその多くない。本プログラムは、その稀有な機会を惜しみなく提供することで、日本の科学技術水準への関心を高める狙いがあった。また、招へい国や招へい者の立場に多様性をもたせたことにより、学生交流を促進させる目的のみならず、日本と世界との架け橋となるような人材の創出を目指した。

実際には、今回のプログラム実施を通じて、参加した学生の中には、本学への大学院進学に興味を持つ方や本学との交換留学に向けて、真剣に準備に取り組みと決意された方が複数おり、2020年には1名がミャンマーより



修了証を手に笑顔の参加者ら

の立場から意見交換を行い、相互にフィードバックを得ることで、筑波大生にとっても大きな刺激となった。また、最終日のプレゼンテーション発表会では、本国の文化や科学技術、観光資源等について、他国からの参加者に幅広く紹介するとともに、視察した日本の高い科学技術力や日本文化についても、建設的な感想が述べられた。

本学大学院へ入学している。

このような実例からも、さくらサイエンスプログラムは、将来の「輝くアジアの科学技術の進展」にとって、大変効果的なプログラムであることを実感するところである。

### ◎今後の展望

「開かれた大学」を建学の理念とし、発展的な国際展開を行ってきた筑波大学も、2020年からのコロナのパンデミック以降は、学生交流はほぼ全てが停止し、思うような国際交流ができずにいる。学生の受入れ・派遣ともに不可能に近いという異例の状況になったため、それまで整備を進めていたオンラインでの交流をさらに促進し、国を超えたチャットイベントや学生交流プログラムなどを推進している。オンラインには、移動などにかかる費用負担や時間のロスが少ないこと、ビザなどの手続きを気にせずに気軽に参加できることなど、利点も多い。しかし、さくらサイエンスプログラムの当時の様子を思い起こせば、「体験すること」は人の学習において非常に重要であることは間違いない。今は我慢を強いられている学生達にも、自由に他者と交流すること、自由に海外へ行き、また、自由に海外からの招へい者と交流すること、当たり前だった日常が早く戻ってくることを祈っている。



報告会でプレゼンに聞き入る参加者

最後に、本プログラムを実施するに当たり、JSTさくらサイエンスプログラム推進本部に多大のご支援を賜ったことに対し、厚く御礼申し上げます。各訪問先機関での実施協力者ほか、関係された皆様にも心より感謝申し上げます。